第4分科会

Ⅱ教育課程／知性・創造性

知性・創造性を育む
カリキュラム・マネジメントの推進

越前和紙の里（越前市）

第4分科会

知性・創造性

地域での PR 活動

1　研究課題

知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメントの推進

2　趣　旨

少子高齢化が加速し、グローバル化や先端技術の高度化が進展する社会の中で、子どもたちは夢や目標をもち、自分のよさと可能性を信じて他者と協働しながら主体的に課題解決を図り、新しい社会を創造し、豊かで幸せに生き抜く力を身に付ける必要がある。

学校においては、生きて働く知識･理解の習得、未知の状況にも対応できる思考力･判断力･表現力の育成、学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養を目指した教育課程を編成しなければならない。また、子どもたちに求められる資質･能力を社会と共有し、連携および協働によりその実現を図っていく「社会に開かれた教育課程」を実現していく必要がある。

そのためには、教育の内容を教科等横断的視点で組み立て、人的または物的な体制を確保するとともに、学習効果の最大化を図るために実施状況を評価し、改善を行っていく「カリキュラム・マネジメント」の実現が求められる。

本分科会では、校長のリーダーシップの下、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会が共有し、新しい社会を生き抜く子どもを育てるための各学校の特色を生かしたカリキュラム・マネジメントについての具体的方策と成果を明らかにする。

3　研究の視点

（1）主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の推進

学校における教育活動を進めるに当たり、新学習指導要領の総則に、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して、創意工夫を生かし、特色ある教育活動を展開し児童に生きる力を育むことが明記された。

授業改善には授業の質的な転換と教師の指導力向上が不可欠であり、その具体的な実現のためには、一部の教職員だけではなく学校全体の取組として実践していかなければならない。校長には、これまでの校内研究の改善・充実、全教職員の意識改革・共通実践を実現するための学校経営が求められる。

このような視点から、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を推進するための校長の果たす役割と指導性を明らかにする。

（2）知性・創造性を育む教育課程の編成・実施・評価・改善

新学習指導要領の改訂の趣旨として、育成すべき資質・能力を育むうえで、カリキュラム・マネジメントと主体的・対話的で深い学びの両輪がバランスよく機能することが求められており、授業改善の推進とともに、教科等横断的な視点から教育課程の工夫・改善を図ることが重要である。

そのため、校長には、全教職員が子どもたちに育成すべき資質・能力について共通理解を深め、必要な学習指導の工夫や教材の開発について協働して取り組み、実践の結果を基に教育課程の見直しを常に図っていく仕組みを確立することが求められる。

このような視点から、知性と創造性を育む教育課程を編成・実施・評価・改善していくための校長の果たすべき役割と指導性を明らかにする。

第４分科会

研究の視点　主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の推進

研究発表題　生きる力を育む特色ある教育活動の展開

福井県越前市坂口小学校長　田倉　弘一

Ⅰ　研究の趣旨

社会が情報化や技術革新、グローバル化等により、予測を超えて加速度的に進展することが予想される中、学校教育には、子どもたちが自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、判断して行動できる力を育成することが求められている。「予測困難な社会」という意味では、コロナ禍によって生まれたニューノーマルにどう対応していくか、という課題が突然突きつけられた現在、この力は今すぐにでも必要であると言えるかもしれない。

さて、本年度から始まった新学習指導要領には、これまでも大切にされてきた、「子どもたちに『生きる力』を育む」という目標を継続しながら、「学校で学んだことが将来につながり、生涯にわたってアクティブに学び続けるように子どもの学びを進化させる」ことの重要性が明記されている。「主体的・対話的で深い学び」という視点からの授業改善が新学習指導要領のポイントとして示されて久しいが、総則３－１には、「子どもたちの学びそのものがアクティブで意味のあるものとなっているかどうか」の視点が大事であるということが記されている。具体的には、何ができるようになるかをはじめとして、何を学ぶか、どのように学ぶかを重視しながら、次のような授業を目指して授業改善を進めていくことになる。

・一つ一つの知識がつながり、「分かった」「おもしろい」と思える授業
・見通しをもって、粘り強く取り組む力が身に付く授業
・周りの人たちとともに考え、学び、新しい発見や豊かな発想が生まれる授業
・自分の学びを振り返り、次の学びや生活に生かす力を育む授業

本研究では、特色ある教育活動を展開し、児童に生きる力を育むことを目指し行ってきた授業改善と、そのために校長が果たすべき役割について取り組んだ内容を紹介したい。

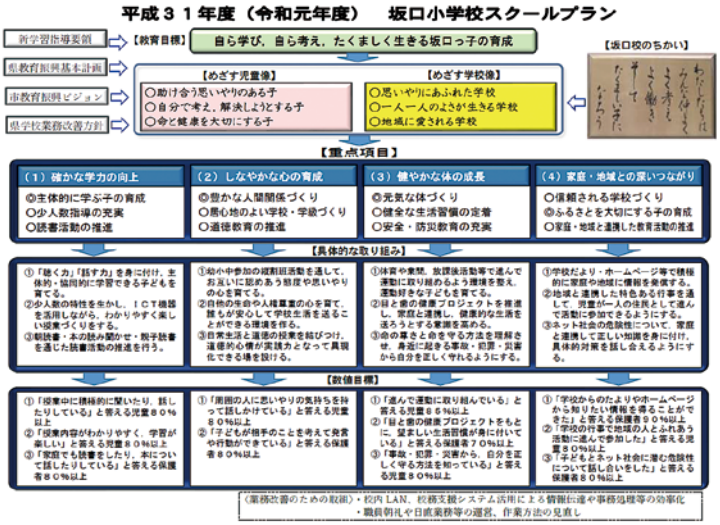
Ⅱ　研究の概要

１　坂口小学校の概要

坂口地区は、豊かな自然の中、川沿いの平地に集落が広がり、10 年ほど前から「コウノトリが舞う里づくり」に取り組み、アベサンショウウオをはじめとする希少種と多様な生き物が生息している。本校は、へき地･複式校で、全校児童数は 24 名である。また、幼稚園と武生第二中学校坂口分校が併設され、園児３名、生徒 11 名が在籍する。中学校には５名の教員が在籍しているが、５名とも兼務が掛けられており、小学生の授業も担当している。小学校からは、体育の免許をもった教員が中学校の授業を担当している。

２　校長の関わり

(1) スクールプランの設定



スクールプランには、重点項目の一つとして「確かな学力の向上」を掲げ、「主体的に学ぶ子の育成」、「少人数指導の充実」、「読書活動の推進」を柱とし、その下位に①主体的に学習できる子どもの育成、② ICT 機器の活用など具体的な取組を示した。教職員は、この内容を基に目標管理表の目標を設定している。令和２年度は、上の①の内容を「言語活動の充実を図り、主体的・対話的で深い学びに向けて、授業改善に努める」とし、教職員の意識向上を促している。

(2) 新学習指導要領の理解の確認

平成 30 年度より道徳科がスタートしたことや、福井県では平成 29 年度から外国語活動が先行実施されたこともあり、新学習指導要領の内容については周知が進んでいたが、昨年度は改めてその概要についての校内研修を２回行った。

(3) 研究主任の選任及び研究方針の検討

研究主任には、本校に着任したばかりの経験豊富な 50 歳代のベテラン教員を選任した。教頭や研究主任と話合いをもち、新学習指導要領を見据え、スクールプランに沿って、研究テーマ「小規模・少人数のよさを生かした教育活動の充実」～主体的・対話的で深い学びの視点から言語活動の充実を図る～を決めた。児童の育てたい力を明らかにした上で、本校児童の課題と少人数のよさを洗い出し、言語活動の充実を図りながら授業改善を進めるよう指示をした。

(4) 教員育成指標の活用

平成 30 年度に福井県教員育成指標が作成された。向上心をもち、学び続ける教員であるための指標となるものである。この中に示された資質･能力については、「採用時」･「20 歳代」･「30 歳代」･「40 歳代以上」の各ステージで求められている姿が具体的に示されている。その中の授業力に関する内容について、職員会議や研究部会の中で、教員それぞれの適性や状況と、求められる資質･能力の関係を把握させ、他のステージの教員の実践事例も学びながら、自己の学びの PDCA サイクルで深め高めるよう促した。

(5) 地域や保護者への説明

学習発表会、PTA 親子行事、家庭・地域・学校協議会（福井型コミュニティスクール）、自治振興会会議などの機会を捉えて、子どもたちに付けたい力、学校での学習状況などについて話をするほか、月１回地区全戸に配付する校長室だよりで、学校の具体的な取組を紹介した。

(6) 働き方改革の推進

教師が子どもの力を伸ばすための努力（授業改善）をするために時間を生み出すことが必要であると考えた。学校の実情に合わせ、効率的な業務運営、教員の多忙感を解消するため、以下の取組を行った。

・ペーパーレス化する。（会議や連絡）
・職員朝礼の回数を減らす。
・地区行事への教職員の参加回数を減らす。
・登校日を日曜日の地区行事に合わせ、月曜日を振替とする。
・巡回時計を廃止する。

全県同一の校務支援システム導入は、年度当初は慣れない部分もあったが、徐々に作業にも慣れ、作業の効率化が図られた。異動しても同じシステムを使うことになるため、今後さらにその効果が期待される。

(7) 週案の活用

働き方改革の見地から、週案は簡略化を図りたいものの一つであるが、日々言葉では伝えられないことを週１回ダイレクトに文章で伝えることができるため、意思疎通の手段としては有効である。週案に書かれた教師の反省などに対してアドバイスをしたり、目当てを明らかにすること、話合いの時間を確保することなどの指示をしたりして､授業改善への意識を高めた。

3　具体的な実践

研究テーマに基づき以下のように研究を進めた。

(1) 少人数のメリットを生かした話合い活動

本校では国語、算数、理科、社会は複式解消しているため、単学年で最高でも児童６名で授業を行っている。従って、学級全体での話合いでも、他の学校でのグループ活動と変わらない状況となるため、多様な意見が出てこなかったり、存在感の強い児童の意見に影響され､考えが偏ったりするなどの影響が見られる。

そこで、少人数のメリットに目を向け、それを生かして話合いが深まる方策を考え、授業を進めることとした。

〈少人数での話合いのメリット〉

・一人一人の発言回数が多い。
・自分の意見を話す時間が十分にある。
・周りの児童が発言をじっくり聞ける。
・発言内容がまとめられない児童に対し、他の児童が考えて伝えたりつないだりして、児童同士の学び合いができる。

〈話合いを深めるための方策として〉

・授業の中に、じっくり考える時間、話し合う時間を確保する。
・教師も一人の発言者として意見を伝える。
・多様な意見が出てくるように教師が質問の技（オープンクエスチョンやあいづち）を使う。
・児童同士をつなげる。（ある児童の発言を他の児童に「どう？」とつなげ意見を求める。）

(2) 必然性のある課題や場面設定

1年算数「おおきさくらべ」

授業の多くは教師が目当てを示し、教科書の流れに沿って授業を進めているが、この単元では、児童が考えたくなる、調べたくなる場面を設定し、児童の気付きを生かし、教師と児童とのやりとりを重視した授業を行った。本時では、「教室の机を廊下に出すにはどうしたらよいか。」という課題に、児童は「本当に出せるのかな。」「どうやって確かめようかな。」などと考えていった。友達や教師とのやりとりの中で、児童は意見を出し合い、間接比較の方法を考え出し、机は廊下に出せることを導き出すことができた。この授業では、教師が児童の実態を十分に把握し、身近で児童にとって必然性のある課題や場面設定により、児童の主体的な学びにつながった。

（授業の様子）

(3) 授業への見通しをもたせる

2年国語「お手紙」

単元を通して課題解決をめざす言語活動として、「音読劇をしよう」という目的をもたせた。場面の様子が分かるように音読するためにはどうすればよいかを主体的に考えさせるために、登場人物の様子や気持ちを想像させ読み進めていった。また、児童同士が音読をし、感想を伝え合う中で、友達との表現の違いに着目させた。なぜそのような読みになったのかを話し合わせることで、場面の様子や登場人物の心情について、より深く考えさせることができた。この授業では、音読劇の実施に向けて、登場人物になりきる、聞く人にとって場面の様子が分かりやすくなるようにする、という具体的な目当てを明確にしたことが、児童の学習への動機付けとなった。

(4) タブレットの活用

5・6年体育「ハードル走」

ハードル走の技術を高めるための方策として、「動きの言語化」「動きのポイントの焦点化」「情報の発信と共有化」等の言語活動を充実させるようにした。単元の目標「ハードルをリズミカルに走り越える」を達成するために、振り上げ足の使い方にポイントを絞り、授業を進めた。資料や友達の動きから、動きのコツを見つけ言葉で表現するとともに、タブレットの動画機能で自己の動きを振り返った。お互いの姿を見合い言葉で伝え合うことが、論理的思考や、技術向上につながった。ICT 機器の活用で、児童同士が動きを比較しやすくなり、互いに助言し合うことができ、学びを深めるのに効果的であった。

(5)「地域と進める体験推進事業」での実践

福井県では、県内全ての小中学校でこの事業に取り組んでいる。本校でも３年間の指定を受け、児童が地域について理解を深める教育活動を充実させ、ふるさとに対する誇りや愛着を高めるため、以下のような取組を行った。

ア．活動のねらい

坂口地区は、過疎化・高齢化が進み、地域の活性化が喫緊の課題となっている。学校の存在は地域活性化の拠り所の一つであり、学校や児童にかかる期待も大きい。そこで、地域と連携し

た体験的な活動を通して、ふるさと坂口を大切にする児童・生徒の育成を図ることとした。

イ．体験活動の概要（「坂口のよさ　はっけん！はっしん！プロジェクト」）

(ｱ) 自然豊かな里地里山を生かした取組

振興会環境部会の協力を得て、もち米づくりや味噌づくりなどの体験活動を行った。矢良巣（やらす）岳や田んぼの生き物調査も継続し、収穫した食材を使ったスイーツの立案や試作も行った。また、坂口の自然の素材を活用したコースターやオブジェづくりにも取り組んだ。

(ｲ) 越前市役所での取組発表およびPR活動

取組の成果発表に加え、自分たちで育てた食材や地元の特産物を使って考案した食品や製品を紹介する坂口のPR活動を行った。

―各学年の実践内容―

〔全学年〕無農薬餅米づくり（田植え、草刈り、稲刈り、しめ縄づくり、もちつき）・オブジェづくり

〔１年生〕販売学習、市役所内ちらし配り

〔２年生〕看板作り

〔３・４年生〕大豆づくり、きなこづくり、味噌かりんとうづくり

〔５・６年生〕求肥（どらやき用）づくり、チラシ作成、発表（体験活動や環境学習について）

（活動の様子）

児童たちは、活動を通してふるさと坂口のよさはどんなところか、そのよさを伝えるためにはどうすればよいかということに、発表会・販売会をイメージしながら取り組んだ。

発表会・販売会当日は、市農政課や教育委員会の協力も得て市役所内でのPR活動を行うことができ、市長をはじめ、たくさんの来客があった。また、県が監修するテレビ番組や、市の広報にも取り上げられるなど、予想以上の反響があった。それまでは自然豊かなところという程度の認識しかもっていなかった児童が、米や大豆などの農作物を生かした食品を販売し、来客の喜ぶ姿を見たり、発表に対して大きな拍手をもらったりして評価されることで、意識していなかった地域のよさに改めて気付き、認知度の低い地区のよさを、さらに多くの人に知ってもらいたいという意識を強め、一人一人の大きな自信、自己有用感にもつながった。

Ⅲ　まとめ

1　成果

(1) 校長として教職員に対し、直接働きかける機会はそれほど多くはないが、どういう児童を育てたいか、教員に今何が求められているかを、会議や週案、面談等で繰り返し伝えることで、教員の意識の統一が図られ、児童の深い学びにつながる授業改善を進めることができた。

(2) 学校の環境を生かし、身近な地域を題材とした取組を行うことで、児童は目的を明確にして、生き生きと学習に取り組むことができた。ふるさとのよさを伝える活動では、日頃の授業で身に付けた力を生かし、自分たちが何のためにこの活動を行っているのかを理解し、見つけた地域のよさをどのように伝えるかについて、様々な意見を出しながら考えを伝え合う姿がどの学年でも見られた。

2　課題

(1) 児童の関心を上手に引き出したり、児童の発言をつなげたりして、深い学びにつなげていくには教師の指導力が必要である。今後研究を継続的に推進するためには、働き方改革をさらに進め、必要な時間を十分確保しながら、学び続ける教師の育成を図っていくことが大事である。

(2) 授業の成果を最大限に生かすための事業として「地域と進める体験推進事業」を位置付け、授業では、話合い活動をどの場面で、どのように行うと主体的に深め合う活動となり、私たちが目指す授業に近づくのか、教科を越えて横断的に研究、実践をさらに深めていきたい。

第４分科会

研究の視点　知性・創造性を育む教育課程の編成・実施・評価・改善

研究発表題

知を拓くカリキュラム・マネジメントと校長の役割

石川県白山市立松任小学校長　土田　雅彦

Ⅰ　研究の趣旨

石川県白山市小中学校校長会は、小学校 19 校中学校９校（うち１校が小中併設校）から構成されている。平成 30 年度、令和元年度 19 校の小学校校長会の４分科会のうちの１分科会で、２年間に渡り、以下の「カリキュラム・マネジメント」の三つの側面である「必要な教育内容を組織的に配列（教科横断的な視点）」「実施状況の PDCA サイクルの確立」「外部の人的、物的資源等の効果的活用」を重視して、校長の研修と研究を推進してきた。各校の取組、先進校視察、アンケートの実施により、効果的な校長の役割と指導性を探り、成果と課題を明らかにしていく。

１　平成 30 年度の取組

(1) 各学校での実践（分科会所属小学校６校の実践）

(2) カリキュラム・マネジメント（以下カリマネ）に関するアンケートを白山市内小中学校長を対象に実施

(3) 先進校の視察
東京都町田市立鶴川第二小学校

２　令和元年度の取組

(1) 令和２年度学習指導要領全面実施へ向けての取組実践

(2) カリマネに関するアンケートを白山市内小中学校長を対象に実施。

(3) 先進校の視察
神奈川県横浜市立折本小学校

Ⅱ　研究の概要

初年度の平成 30 年度は、カリマネの理解度取組の進捗状況を把握することと、暫定的に研究の着眼点を設定し、試行的な実践を推進した。その中で、実践を共有することと研究の目的と方法を整理し、先進校視察で理解を深め、市内小中学校長対象のアンケートにより課題と成果を洗い出した。

２年目の令和元年度は、初年度に明らかになった課題の一つである「育む資質・能力の絞り込み」を各校で推進することと研究を市内小中学校長に共有したり、アンケートによりいくつかのポイントを意識化することで、市内小中学校での一定のカリマネの推進を図るとともに、校長の指導性と役割について考察し、成果と課題を明らかにした。

１　平成 30 年度の取組

(1) 白山市内の小中学校長へのアンケート結果

ア　「職員はカリマネの意味を理解しているか」
あまり理解していない　79%

イ　「校内研修は年度内に行う計画はあるか」
ある　37%

ウ　「カリマネに取り組む予定はあるか」
ある　58%

エ　まとめ
カリマネについての理解は不十分
カリマネを研修に位置づけているのは４割
カリマネ実施予定は６割→「働き方改革」の影響もあるか

(2) 各学校の取組、実践の研究手法

ア　効果的なカリマネの方法　着眼点・切り口を試行する

イ　暫定的な着眼点（カリマネ視点）を設定する
→実践は試行的な実践を行う
効果的な PDCA サイクルの在り方を探る

ウ　研究の目的と方法

（ア）重点化：重みの判断：活動の軽重

（イ）焦点化：育む資質能力を絞る

（ウ）一体化：多様な活動を重ねる企画

（エ）共有化：目的や方法の共有、モデル等の共有

（オ）地域活用：地域資源の活用

(3) 校長の果たすべき役割と指導性

ア　一貫性のある編成方針

イ　重点化・モデル化による共通理解

ウ　PDCA を柔軟にコントロールすること

(4) 平成 30 年度のまとめ（先進校に学ぶ）

東京都町田市立鶴川第二小学校

ア　研究理論

イ　共通実践（指導体制の確立）

ウ　子どもの育ち

町田市立鶴川第二小学校では、この三本柱が確立されており、組織体制が充実しており、長期の教育課程編成の試みがあり、「メタ認知力」を育成している。

(5) 平成 30 年度の課題

ア　カリマネの目的となる「育む資質・能力」の設定（絞り込み）が不十分である

イ　カリマネの方法の確立（カリマネ視点の改善のシステムの構築）が必要である

鶴川第二小学校　後藤校長による学校経営懇談会

鶴川第二小学校　スキル科の授業

鶴川第二小学校　スキル科の授業板書

鶴川第二小学校　６年教室掲示

2　令和元年度の取組

平成 30 年度の課題を念頭に、白山市内各学校の取組を推進するとともに、平成 30 年度同様に白山市内小中学校長を対象にアンケートを実施し、その結果等からカリマネの推進状況と課題を探ることとした。

ア　「職員はカリマネの意味を理解しているか」
　あまり理解していない
　79%（H30）→64%（R１）
イ　「校内研修を年度内に行う計画はあるか」
　ある　37%→57%　※小学校では79%
ウ　「カリマネに取り組む予定はあるか」
　ある　58%
エ　「カリマネは進んでいるか」
　やや進んでいる　４%、進んでいる　39%
　合計43%
　小学校では合計47%
オ　「令和元年度中にカリマネを実施」68%
　※小学校では73%
カ　「カリマネを充実するために必要なこと」（優先順位の高いものから）
　小学校１位　校内での研修
　　２位　先行実践の研究
　　３位　教務主任等の協議
　中学校１位　教務主任等の協議　校内での研修
　　２位　学校間の情報共有
キ　「カリマネ実施で効果的な取組」（実施済や構想していること）
　・カリマネの教育課程改善に繋げるカリマネ授業（板書の写真と教師のふりかえりの記録を月１回程度実践し、教育課程に綴り込み次年度に活かす）
　・学校評価や児童アンケートとの整合性や改善
　・総合的な学習の時間の単元構成・評価・学習の見える化、教育課程の位置づけ
　・教務主任を先進校へ派遣し、直接見聞し、体験的に研修
　・研究校の視察
ク　育みたい資質・能力の絞り込み
　アンケート項目に主体性、思いやりのある温かい心、最後までやりきる力（忍耐力・粘り強さ）、思考力、判断力、伝え合う力（コミュニケーション能力）、協働力、課題発見・解決力、企画力（計画・立案する力）、省察力、読解力、情報活用能力、その他とし、選択しその他については自由記述とした。
　白山市内小中学校のアンケート結果は以下のとおりであった。
　小学校１位　主体性、伝え合う力（コミュニケーション能力）　74%
　　２位　思考力、課題発見・解決力　63%
　　３位　協働力　47%
※情報活用能力40%、読解力27%と低い傾向
　他に体力、人間形成能力の記述あり
中学校１位　伝え合う力（コミュニケーション能力）　90%
　　２位　主体性、判断力　55%
　　３位　思いやりのある温かい心、最後までやりきる力　44%
※情報活用能力22%、読解力11%と低い傾向
　企画力０%と低い。他に自己有用感の記述あり。

Ⅲ　まとめ

(1) 令和元年度成果と課題

ア　まとめⅠ

（ア）成果

　平成30年度白山市校長会の課題の一つであった「育みたい資質・能力の絞り込み」については、小学校の学習指導要領完全実施を令和２年４月に控えていることと、白山市校長会内での研究発表やアンケート実施により一定の進捗が見られた。

　令和２年度に、あるいは、令和２年度に向けて、校長としてカリマネで取り組みたいことについて、資質・能力の絞り込み、必要な教育内容の配列、教育課程の評価PDCA、人的物的な外部資源の活用の４つから優先順位の高いものからアンケートで回答を得た。その結果は、小学校では、１位教育課程の評価PDCA、２位資質・能力の絞り込みであった。また、最も取り組みたいことに資質・能力の絞り込みと教育課程の評価PDCAをそれぞれ47%の校長が挙げて回答していた。

（イ）課題

　他の３項目も重視しながら、教育課程の評価PDCAをどのように具体的に効果的効率的に実施していくかが大きな課題となった。また、成果として挙げたが、令和２年度を迎えるまでに、小学校では、資質･能力の絞り込みを行い、中学校でも令和元年度から令和２年度において実施していくことが課題であることも回答結

果からわかる。学校内の職員にカリマネの理解を高めることとカリマネの必要性を十分認識させることを行い、先進校の視察や校内研修・他校との情報共有等を更に行い、実効性の高いカリマネを実施していきたいと考えている。

イ　まとめⅡ

先進校に学ぶ

令和元年　神奈川県横浜市立折本小学校視察

横浜市立折本小学校の取組例

カリキュラムのデザイン		組織マネジメント
（物）	＜一体化＞	（人）
グランドデザイン		カリキュラムマネージャー
教科横断的カリキュラム		カリ・マネ部
更新・進化するカリキュラム		校内外の研修
		全職員の参画

横浜市立折本小学校では、「物」のカリキュラムデザインと「人」の組織マネジメントが十分実施されており、職員にカリキュラムマネージャーが担当として配置され、組織の中に「カリ・マネ部」を設置し、研修の実践、校外研修の職員への還元、全職員の参画のシステムが構築され、実効性をもってカリマネが推進されている。

（ア）学校教育目標を創るプロジェクト

（児童・保護者・地域と協働的に設定）

グランドデザインの設定

電子カリキュラムの作成　　※校長がもとを作成

カリキュラム・マネージャーが取組を推進

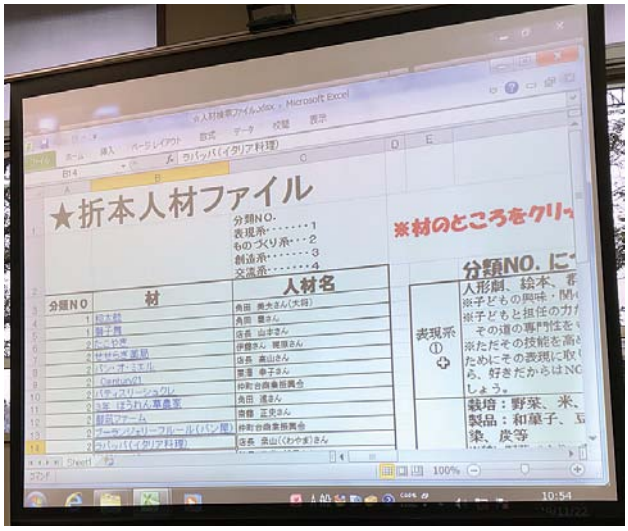
（イ）校務分掌に「カリ・マネ部」を組織

折本小学校　栄校長による学校経営懇談会

ウ　まとめⅢ

校長の指導性と役割

育む資質・能力の決定方針や主任等を巻き込み教育課程の編成・学校評価等アンケートの改善、地域資源・人材の活用のための校内データの整理共有のシステム化、学校だよりやPTA等の会合等を活用し、目指す児童像や学校教育目標、育む資質・能力を保護者・地域に発信啓発して共有することを校長自身が直接行ったり、コーディネートしたり、ファシリテートしていくことが更に求められていると思われる。地に足がついた形で、教職員に着実に目的理念と具体策をつなぐ方策やイメージを示しながら、カリマネを推進することも大切だと思われる。



折本小学校　人材ファイルがリンクされ共有

折本小学校　児童による学校教育目標ポスター